

宮崎市文化財調査報告書 第92集

たけ の やま
竹 ノ 山 遺 跡

携帯電話用通信無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2013

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第92集

竹ノ山遺跡

100

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第92集

たけ の やま
竹 ノ 山 遺 跡

携帯電話用通信無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎市教育委員会

序 文

本書は、宮崎市清武町今泉における携帯電話用通信無線基地局建設により、民間事業者から委託を受け実施した竹ノ山遺跡発掘調査の報告書です。

近年、通信無線基地局建設に伴う埋蔵文化財の照会が相次ぎ、この竹ノ山遺跡では、平成24年度に記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施しました。

この遺跡からは、旧石器時代の石器や縄文時代の陥し穴状遺構のほか、溝状遺構などが確認されました。

これらの調査成果は、この地域の歴史を知るうえで貴重な資料であり、今後、学校教育や生涯学習など、市民の方々に大いに活用して頂けることを期待します。

最後に、この調査を実施するにあたり、ご理解並びにご協力を賜りましたことを、民間事業者をはじめ地元の皆様や各関係者の方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成25年3月

宮崎市教育委員会

教育長 二 見 俊 一

例 言

- 1 本書は携帯電話用通信無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成24年8月31日～平成24年9月10日の期間実施した。
- 3 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

調査総括	課長	田村 泰彦
	課長補佐	山田 典嗣
埋蔵文化財係	副主幹兼係長	島田 正浩
調査調整・事務	主査	鳥枝 誠
調査員	主査	金丸 武司
	嘱託	川野 誠也

- 4 本書の執筆は、第Ⅰ章の1を鳥枝、第Ⅰ章の2・3を島田、第Ⅱ章の2を金丸が行い、その他は川野が行った。
- 5 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は川野が行った。
- 6 現場の写真撮影は川野が行った。
- 7 本書の編集は川野が行った。
- 8 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
資料の閲覧・利用等に関しては事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。
- 9 地図及び図面上の方位は磁北とする。
- 10 本書で使用した土層の色調は『新版 標準土色帖』の土色に準拠した。

本文目次

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯…………… 1
2. 遺跡の立地と歴史的環境…………… 1
3. 調査の経過…………… 2

第II章 調査の成果

1. 層序…………… 3
2. 旧石器時代…………… 4
3. 縄文時代…………… 4
4. 近世以降…………… 5
5. まとめ…………… 5

挿図目次

- 第1図 調査区周辺主要遺跡分布図…………… 1
- 第2図 遺跡周辺地形図…………… 2
- 第3図 基本土層模式図…………… 3
- 第4図 遺構配置図…………… 3
- 第5図 出土石器実測図…………… 4
- 第6図 陥し穴状遺構土層図・平断面図…………… 4
- 第7図 溝状遺構土層断面図…………… 5

図版目次

- 図版1…………… 6
調査区 全景（北西より）／調査区 全景（西より）
- 図版2…………… 7
陥し穴状遺構検出状況（西より）／陥し穴状遺構完掘状況（西より）／
溝状遺構完掘状況（北西より）／出土遺物

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成24年3月6日、民間事業者より携帯電話用通信無線基地建設に伴う宮崎市清武町今泉字山ノ口丙1930-1の埋蔵文化財事前審査調書の提出があった。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「竹ノ山遺跡」の域内に含まれることから、確認調査が必要であると回答し、平成24年3月29日～30日に確認調査を実施した。確認調査では、縄文時代の陥し穴状遺構、時期不明の溝状遺構が確認された。

確認調査で遺構が確認された為、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、建設工事の際の掘削により遺構の保存が不可能な範囲並びに長期間に渡って占有される範囲の100㎡（10m四方）について、発掘調査を行い記録保存の措置をとる事となった。

その後、平成24年7月17日に民間事業者と発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査は、平成24年8月31日から9月10日までの期間行った。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

竹ノ山遺跡は、水無川左岸の段丘上にある今泉工業団地の北側に形成された東西に細長く延びる台地上に位置する。この台地の北側は、清武川と岡川と水無川が合流する所であり、その周辺は氾濫源となる低地が広がっている。



- 1. 竹ノ山遺跡 2. 岡第4遺跡 3. 岡第3遺跡 4. 岡第2遺跡 5. 岡第1遺跡
- 6. 中泉遺跡第1地区 7. 中泉遺跡第2地区 8. 中泉遺跡第3地区
- 9. 中泉遺跡第4地区 10. 中泉遺跡第5地区 11. 中泉遺跡第6地区
- 12. 田代堀遺跡 13. 上ノ原遺跡 14. 清武城 15. 清武上猪ノ原遺跡

第1図 調査区周辺主要遺跡分布図（S = 1/25,000）

水無川を挟んだ南側の台地では、角上原遺跡群が調査されている。旧石器時代も確認されているが、その遺跡群の中の上ノ原遺跡では縄文時代早期の塞ノ神式土器や縄文時代晩期の土坑、中近世の陶磁器が確認された。さらに、田代堀遺跡では、縄文時代晩期の精製磨研土器や粗製土器、弥生時代や古墳時代の竪穴住居跡、中近世の掘立柱建物跡が確認された。

遺跡の北側には、祝田川と岡川に挟まれた台地上に岡第4遺跡が所在する。この遺跡からは後期旧石器時代のスクレーパーなどの石器、縄文草創期の隆帯文土器、縄文時代早期の集石遺構や陥し穴状遺構や炉穴と、遺物として打製石鏃・石匙・スクレーパーなどの石器や前平式・塞ノ神式・押型文・別府原式などの土器、古代の竪穴住居跡と共に土師器や布痕土器が確認されている。

さらに北には、九州縦貫道により寸断された清武城跡、その北西に広がる船引台地には、縄文時代草創期の竪穴住居跡がまとまって検出された清武上猪ノ原遺跡など、多くの遺跡が所在する。

次に文献資料等からは、鎌倉時代の「建久凶田帳」があり、宇佐宮弥勒寺領として船曳五十町、八条女院御領国富庄として、加納二百町、今泉三十町を見ることができる。

南北朝時代には、国富庄が足利氏の所領となり、政所が南加納に置かれる。

室町時代には、伊東氏と島津氏との激しい攻防が始まるが、伊東祐堯の時に日向のほぼ全域を平定してからは、約百年間は伊東氏の所領となる。

伊東氏は木崎原合戦以降に勢力が衰え、清武は一時島津氏の領土となるが、豊臣秀吉の九州征伐後にそのほとんどが伊東氏の所領となり、江戸時代（約300年間）はその所領が続く。

3. 調査の経過

調査は、8月31日にバックホウを使って表土剥ぎを行い、陥し穴状遺構と溝状遺構を確認した。9月3日から遺構とトレンチの掘削を始め、トレンチから石器が出土した。4日から写真撮影、5日から実測作業を始めた。9月7日に全景写真を撮影し、撤収作業を行った。9月10日にはバックホウによる埋め戻しを行い、調査を終了した。



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1/5,000)

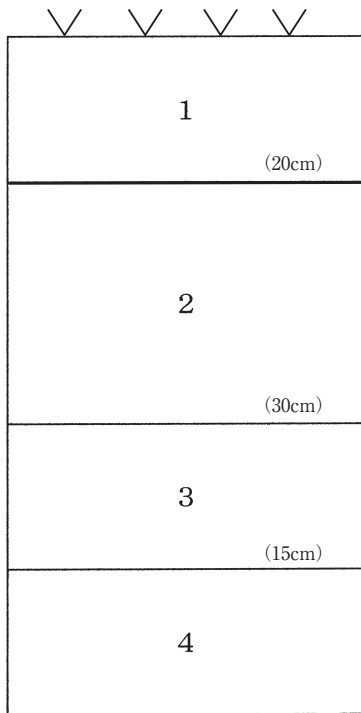
第Ⅱ章 調査の成果

1. 層序

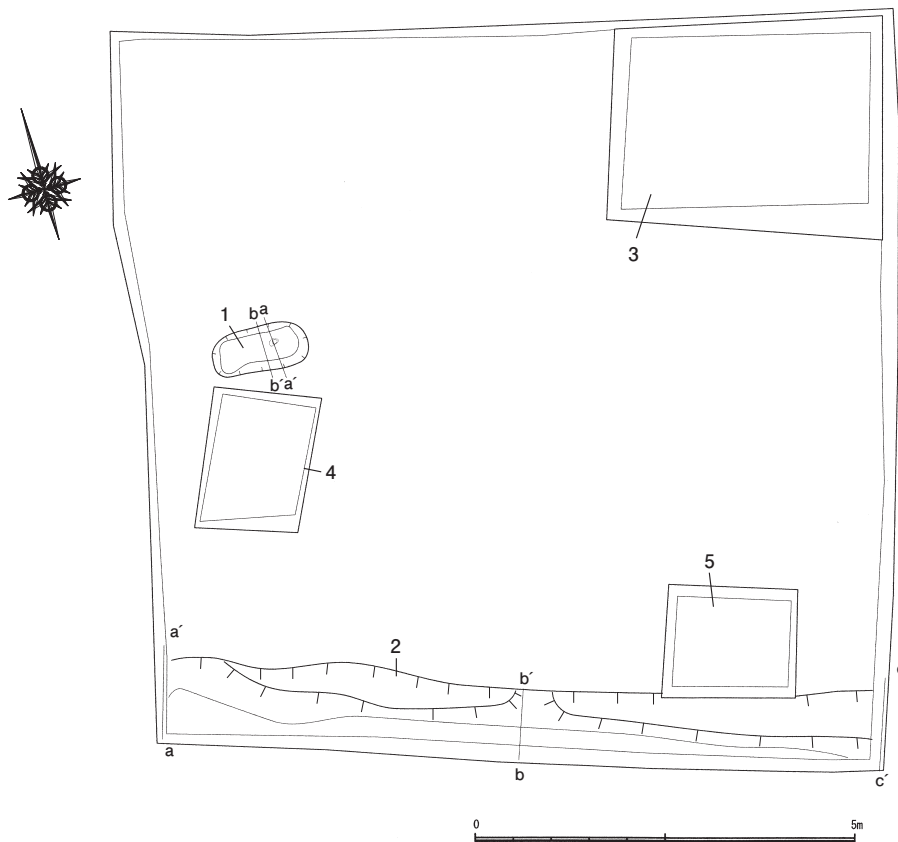
竹ノ山遺跡基本層序は以下の通りである。

- 1 (Hue10YR 4/6 褐色) 耕作土の層である。
- 2 (Hue7.5YR 4/4 褐色) シラスのブロックを少量含み非常に締りがある。
- 3 (Hue7.5YR 6/8 明黄褐色) シラスを多く含む約20cmの層。旧石器時代と思われる遺物はこの層から出土した。
- 4 (Hue10YR 6/6 明黄褐色) シラス層。

※2層は近世に削平を受けているため、約30cmしか残存していない。

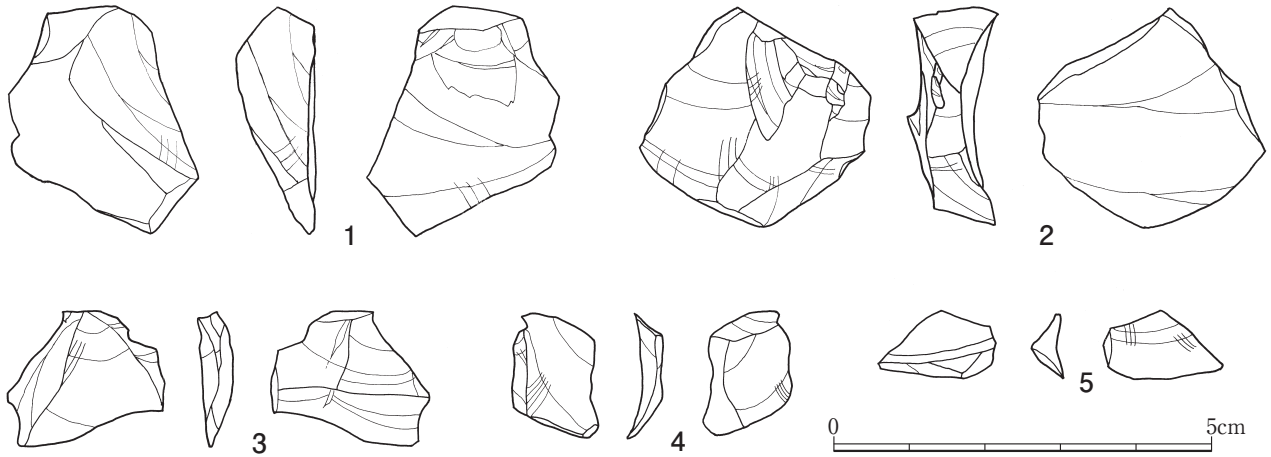


第3図 基本土層模式図



1. 陥し穴状遺構 2. 溝状遺構 3. トレンチ1 4. トレンチ2 5. トレンチ3

第4図 遺構配置図 (S = 1/50)



第5図 出土石器実測図 (S = 1/1)

2. 旧石器時代

トレンチ3の3層から石器が8点出土した。遺構等は確認されていない。

第5図は、旧石器時代に属する出土石器の実測図である。1は、ネガ面の観察から、礫面除去に伴う剥片剥離を行う中で作出された剥片である。長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.75cm。ホルンフェルス製。2は、打面転移を繰り返す中で作出された肉厚の剥片である。打点はポジ面上端部である。長さ3cm、幅3.3cm、厚さ1.2cm、ホルンフェルス製。3は、上部から連続的に加撃を行った剥片である。縦長剥片剥離を意図した工程の中で剥離されているが、ポジ面にはステップの痕が明瞭に残されており、不定形な形状で剥離されている。使用痕は認められない。長さ2.1cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、ホルンフェルス製。4は打面が広く下部が薄いため、打面調整に伴って作出された剥片と考えられる。長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、ホルンフェルス製。5は打面を折損している。何らかの二次調整を行う際に剥離された剥片と考えられる。縦0.8cm、横1.6cm、厚さ0.3cm、ホルンフェルス製。

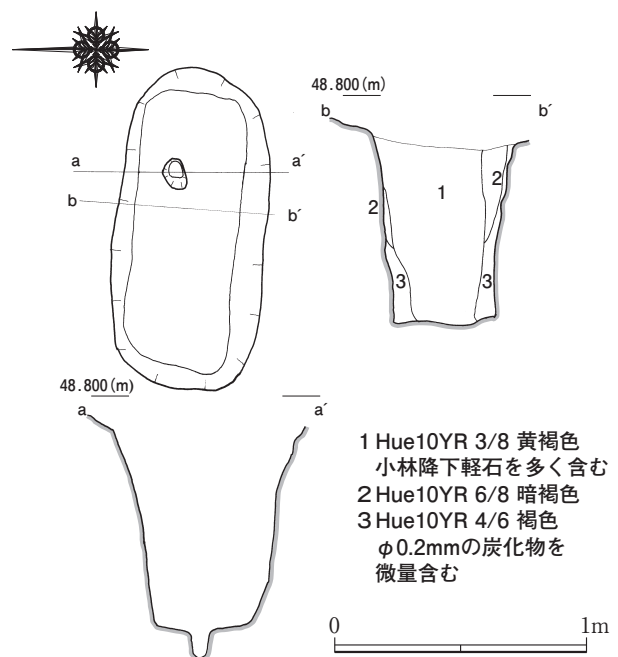
3. 縄文時代

縄文時代の遺構は、陥し穴状遺構が1基検出された。

陥し穴状遺構は、調査区の西側より検出された。長軸1.25m、短軸0.59m、深さ0.84mの楕円形である。遺構の長軸は東西を向いており、尾根に平行する。

底面の東寄りから、長軸10.1cm、短軸7.4cm深さ9cmの小穴が認められた。これは逆茂木の痕跡と考えられる。

遺物の出土はないため埋没時期は不明であるが埋土が殆ど小林降下軽石で構成されているため、埋没時期は縄文時代早期と予想される。縄文時代に属する遺構および遺物は、これ以外確認されなかった。



第6図 陥し穴状遺構土層図・平断面図 (S = 1/30)

4. 近世以降

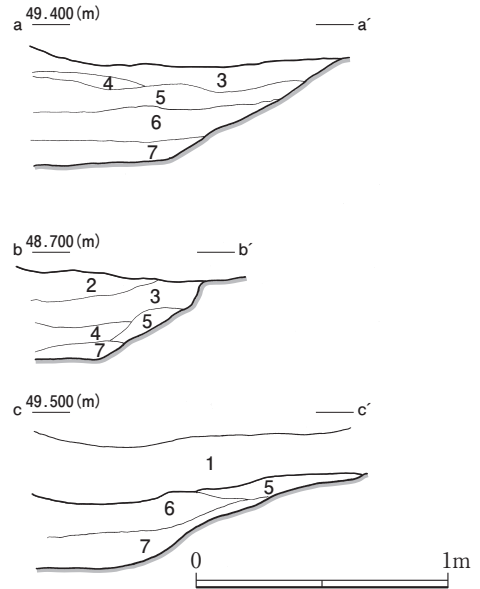
調査区の南端で溝状遺構が1条検出された。南東から北西部へ、標高49mの等高線に平行するように延びる。上部を後世の削平により喪失しており、残存部は深さ30cm～40cmである。また幅は、調査区外に続いているため不明である。この状況から、地形上の落ち込みである可能性も考えられるが、遺構の底面が平坦であることや、埋土底面に安定した堆積が認められることから、溝状の遺構と考えられる。残存状況や検出位置の問題から、時期は不明であるが、底面より陶磁器の破片が出土したことから、埋没時期は近世以降の可能性が考えられる。

なお、用途は不明である。

5. まとめ

今回の調査成果は、旧石器時代の遺物の他、縄文時代早期の陥し穴状遺構1基、近世以降と思われる溝状遺構が1条である。

調査地が尾根状の畑地の下段にあり、かつ調査面積が97㎡と、遺跡の様相を把握するには狭かったため、今回は遺構や遺物の確認に留めざるを得ない。



- 1 Hue10YR 4/6 褐色
- 2 Hue7.5YR 4/6 褐色
- 3 Hue7.5YR 3/4 暗褐色
- 4 Hue7.5YR 4/4 褐色
- 5 Hue7.5YR 4/4 にぶい褐色
- 6 Hue7.5YR 4/4 褐色
- 7 Hue10YR 4/6 褐色

第7図 溝状遺構土層断面図 (S = 1/30)

参考文献

九州縄文研究会 2004年 『九州における縄文時代のおとし穴状遺構 発表要旨・資料集』

清武町教育委員会 1990年 清武町遺跡詳細分布調査報告書

清武町埋蔵文化財調査報告書 第4集

図版 1



調査区 全景 (北西より)



調査区 全景 (西より)



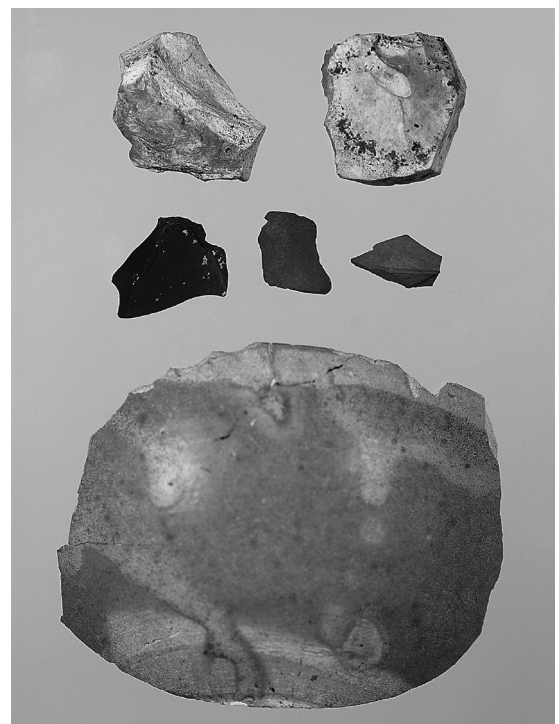
陥し穴状遺構検出状況（西より）



陥し穴状遺構完掘状況（西より）



溝状遺構完掘状況（北西より）



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	たけのやまいせき							
書名	竹ノ山遺跡							
副書名	携帯電話用通信無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第92集							
編著者名	川野 誠也							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836							
発行年月日	2013年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけのやまいせき 竹ノ山遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 きよたけちやういまいずみあざ 清武町今泉字 やまのくちへい 山ノ口丙1930 ばん 番1	45201	53026	31° 50' 47" 付近	131° 22' 41" 付近	2012.8.31) 2012.9.10	97m ²	携帯電話 用通信無 線基地局 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
竹ノ山遺跡	散布地	旧石器	●	剥片石器	逆茂木痕を検出			
		縄文	陥し穴状遺構	●				
		近世以降	溝状遺構	陶磁器				
要約	本遺跡は宮崎市清武町にあり、舌状に伸びた台地上にある。遺跡の時代は旧石器から近世まで。縄文時代のものと思われる陥し穴状遺構1基を検出。底面で逆茂木痕1ヶ所を検出。							

宮崎市文化財調査報告書 第92集

竹ノ山遺跡

2013年3月

発行 宮崎市教育委員会